仏教を身近にする伝道誌　　浄土真宗を弘める会

道標

どうひょう

d o h y o

2018 春季号

年間特集　「看取る」と言うこと、「看取られる」ということ

第二回・「お迎え現象」が逝く人と見送る人にもたらすもの　**奥野滋子さん**

連 載

あなたのいのちの物語　笑いで包む心の痛み

習わしを科学する　日本人の歩きかた

道しるべ　昼夜六時に曼陀羅華を雨ふらす

年間特集

「看取る」ということ、「看取られる」ということ。

第二回 奥野 滋子さん

「お迎え現象」が逝く人と見送る人にもたらすもの

これで私はもう大丈夫です

腹水でお腹は膨らみ、顔はやつれ、手足はやせ細り、見るからに衰弱している彼女は、60歳の卵巣がん患者である。夫とは10年前に死別し、子供がいないため一人暮らしをしている。ある日の朝の回診で、

「先生、昨日の夜お母さんが会いに来てくれたんです」

「お母さんはそこのベッド脇のソファに座って、窓の方を見ていました。でも全然私の方を見てくれないの。寂しかった。近くに来てって言ったけど聞こえないみたいで」

「手を差し出しても掴んでくれない。寂しい。お母さんに何か悪いことしたかな」

母親は彼女が幼い時に病死しており、ずっと会いたいと亡き母を想い続けてきた。

翌日の回診でも彼女は暗い顔をしながら、「お母さんは背を向けたままずっとそこにいる」と話し、「早くこっちを向いてほしい」と訴えた。翌々日の朝、彼女は非常にすがすがしい顔をして私たちを待っていた。

「お母さんがやっと私の方を見てくれたの。私の手をつかんでしっかり握ってくれたの。私これできっとお母さんのもとに行けるのね。うれしい。先生、みなさん、いろいろお世話になりました。ありがとうございました。これでもう私は大丈夫です」

その日の午後、突然血圧が低下して意識がなくなり、そのまま夜に亡くなった。

先祖に見守られて旅立つ

嚥下（えんげ）機能が低下して誤嚥（ごえん）性肺炎を繰り返し、「余命は長くて約1週間、今日亡くなっても不思議ではない」と医師から説明を受けた家族は、「じいじ」を家で看取ると決心した。

小高い山の麓にある旧家で、代々その土地で農業を営んでいたという。自宅1階中央部分に二間続きの広い和室があり、奥の部屋には古くて大きな仏壇が置かれていた。また部屋の壁には、亡くなったその家の人びとの写真が10枚ほど飾られている。

「ここの家の人たちは、みんなこの部屋で最期の時を過ごしてあの世に旅立っていったの。この人の両親もここで看取りました。仏さんたちが見守ってくれています。もう長くないなら、この部屋で親族みんなで過ごして、先祖さんの所に送ってあげたくて」と妻は言った。退院時には話すこともできなかった「じいじ」は、かすれた小さな声で妻や子供、孫たちとしばらくの間話すことができ、穏やかな表情を見せていた。と同時に、そこにはいない人の名前を呼び、誰かと話をしているようにもみえた。妻は「ご先祖さんが迎えに来てくれたみたいだね。「じいじ」だけじゃなくて、見送る私たち

「私これできっと
お母さんのもとに行けるのね。」

にとっても「一人じゃない」と思えることは安心。あとは先祖さん達にお任せすればいい」と話した。最後の自宅療養中に妻の誕生日を共に迎え、退院後7日目に旅立った。

先祖に見守られて旅立つ

死の怖れ、永遠の命への希求、親しい人との死別の悲嘆は、場所や時代を問わず、人間にとって共通の重要な問題です。しかし病院で最期を迎える人が多い現代は、死が遠くにあり、死のプロセスを目の当たりにすることはほとんどありません。死の臨床現場では、死にゆく人たちは「お迎え」にきた相手とともに居たり、話したりすることを普通と思っていることが少なくありません。彼らの出現のしかたや会話も自然で、恐怖や不安も感じていないように見えます。その人のもとに一緒に行きたいという希求と一種の安堵感のようなものを感じることがあります。

死が避けられないとすると、生の意味を拡大解釈して死の苦悩を和らげようとする考えが出てきます。死後生を願い、先祖となって家族、

イエを守っていく存在となることも、生の意味の拡大解釈の一つの形かもしれません。

「看取り」によって生者と死者の共存関係を築く

旅立つ人を最期のときまで世話をし、静かに見守っていくのが「看取り」です。

「看取り」は、逝くものと遺されるものの双方が自らの死生について学び、死生観を養う貴重な体験と言えます。とりわけ、看取る側にとっては大変有益な体験となると思います。なにしろ、自分にとって死はたった1回限りです。死が目前に迫ってきて初めて死に向き合うのではなく、あらかじめ死に逝く人から様々な教えを乞うことで、自分の死の時にも役立つわけです。

「看取り」とは、そうした「死の予習」ができる大切な機会だと私は考えています。現代は死が個人の責任とされ、「ひとりっきりの死」の概念が一般化されている傾向にありますが、生の日々に築かれた愛や絆だけでなく、「お迎え現象」のように、目には見えぬがいつも自分を見守ってくれている存在に導かれて死んでいくと感じることができるなら、人は死の孤独や恐怖から救われるのではないかと思えるのです。病気になり、最期が近づいてからではなく、まだ元気で健康なときに「お迎え現象」を知っておくことが大切だと感じています。

「看取り」は生者と死者のきずなを育み、より太く、強固なものにしていくことができます。

死は単なる生命の断絶ではなく、生者と死者の共存関係を築いていくきっかけであることを、看取りを体験することで気付くことができるのではないでしょうか。

看取りは「死の予習」。

奥野 滋子（おくの しげこ）

1985年金沢医科大学卒業後がん患者さんの術後再建を学ぶため形成再建外科講座に入局。難治性疼痛患者に出会い、疼痛治療を学ぶため麻酔科に転向。1987年から順天堂大学麻酔科で、麻酔・集中治療、ペインクリニックに従事。この間に末期がん患者さんの苦痛を目にし、緩和医療を志す。

社会福祉法人医療伝道会総合病院衣笠病院ホスピス、神奈川県立がんセンター緩和ケア病棟、順天堂大学医学部付属順天堂医院がん治療センター、緩和ケアセンターでホスピスケア、緩和ケア病棟、緩和ケアチームを経験し、2013年4月より、藤沢市にある医療法人社団若林会湘南中央病院在宅・緩和ケア部門に所属し在宅緩和ケアを行っている。

順天堂大学医学部客員准教授／医学博士／人間科学修士（宗教死生学分野）

Your Spiritual Stories
あなたのいのちの物語

「宗教」って自分と縁の遠いもの。そんなふうに考えていませんか？この新連載では、身近な「物語」に息づく「宗教のタネ」を掘り出していきます。物語を通して、あなたの「いのち」のあり方を考えてみましょう。

2話目

「笑いで包む心の痛み」

ゴーゴリ『外套』（平井肇訳、岩波文庫）

ウクライナ生まれのロシア語作家、ニコライ・ゴーゴリが一八四二年に発表した小説。主人公はアカーキイ・アカーキエヴィッチという下級官吏だ。下級官吏だった父の名もアカーキイだったので、名前は母親が投げやりにつけた。「そこで赤ん坊は洗礼を受けたが、その時彼はわっと泣き出して、あたかも将来九等官になることを予感でもしたような顰（しか）めっ面をした」。

主人公は文書の清書が主な仕事だ。「役所では彼に対しては少しの尊敬も払われなかった」。彼を侮辱するひどい冗談が聞こえよがしに語られもする。だが、彼は「まるで自分の目の前には誰ひとりいないもののように、そんなことにはうんともすんとも口応え一つしなかった。こんなことは彼の執務には一向さしつかえなかったのである」。小心さが力になっている。だが、その彼も「なんだってそう人を馬鹿にするんです？」と言うことがある。「わたしだって君の同胞なんだよ」という気持ちが潜んでいる。そう言われたある若者は、「人間の内心には如何に多くの薄情なものがあり、洗練された教養ある如才なさの中に……如何に多くの凶悪な野生が潜んでいるか」に戦慄を覚えてその後の一生を送ることになる、と作家は述べている。

『外套』を書いたころのゴーゴリ。（F.A. モレル、1841 年）

1890 年代に出版された際のイーゴリ・グラーバリによる表紙

五〇歳を過ぎて一人暮らしのこの主人公の悩みは外套である。着古した外套はみじめな状態で、同僚たちの嘲笑の対象となっており、「半纏」とよばれていた。貧乏で新しい外套を買うことができない。業者にはこれはもう直せないと侮蔑的に言われる。「新調」するしかないと言われて呆然とする。だが、何とか値切って一大覚悟をもって新たな外套の仕立てを決意する。できあがった外套を着た主人公は「ぞくぞくするような気分で浮き立ちながら歩いていた。彼は束の間も自分の肩に新しい外套のかかっていることが忘れられず、何度も何度も、こみあげる内心の満足からにやりにやりと笑いを漏らしさえした」。

直ちに職場の話題になり、からかうように主人公のための「夜会」が開かれる。慣れない夜会であくびも出るが、一二時も過ぎてようやく退出できた。ところが、歩いて家へ帰る途中、広場の隅で二人の男になぐり倒され外套をはぎとられ雪まみれになる。翌朝から、警察署長やら勅任官やらに必死の思いで面会し、外套を取り戻したいと懇願するがていよく追い払われる。勅任官のつれない言葉に傷ついた主人公は吹雪の中を帰宅するとそのまま寝込んでしまう。外套をめぐる悪夢にうなされながら主人公は死んでゆく。その後、夜な夜な官吏の風態をした幽霊が現れ、誰彼の見境なく外套をはぎとる。ある晩、お酒も入ってごきげんの例の勅任官が幽霊に襲われ外套を奪われ、以後、幽霊は出現しなくなった。

苦笑いで包み込まれた悲しい物語だが、時の隔たりを忘れて現代の読者も引き込まれるだろう。人の弱さをここまで見届け、突き放しつつ悲しみを込めて語る作家の心に、日々の私たちの心の痛みを浮き彫りにされるからだろう。

島薗 進（しまぞの すすむ）
1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院実践宗教学研究科教授、著書に、『日本人の死生観を読む』（2012年、朝日新聞出版）、『いのちを〝つくって〟もいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。

習わしを科学する

日本人の歩きかた

歩くことも、気にしだしたら、とても気になるものです。世の中には歩きかた教室や歩きかたのテキストブックがたくさんあって、健康で美しくあるために、歩き方を学ぶ人びとがたくさんいらっしゃいます。

そうかと思うと、まったく頓着しない人も。はたから見ていても、ちょっと直したくなるような変な歩きかたの人も少なくありません。私なども子供のころ、親から「ちょこまか歩いてはいけません」などと叱られたものです。昔の人は案外、歩き方に気を付けていたのでしょう。

さすがに最近の時代劇では時代考証がよくできていて、町人などが手を振って歩いている様子がなくなりました。庶民は腰のあたりに手を付けて歩いたもので、大きく手を振って歩くのは近代の軍隊や体育教育の影響です。

「大手を振ってまかり通る」といういい方は、無法なことがはばかりなく通用することで、良いことのたとえではありません。つまり大きく手を振って歩くような輩はロクでもない威張りくさった人間だという意味なのです。

歩きかたにもいろいろあって、たとえば「練り歩く」という表現があります。祭の行列が練り歩く、というように飾り立てた祭の衆が格好つけて行進する時の様子です。「練る」というのはふだんと違った特別な歩きかたで、江戸時代の吉原で遊女の太夫が揚屋まで歩くのを花魁道中といい、おそろしく高い木履を外側に大きく振りまわすようにする外八文字という独特のスタイルで練り歩きます。

こう言うと練るというのは派手なパフォーマンスに見えますが、本来の意味は静かに歩くことで、古代の朝廷の儀式における歩き方です。当時の文献を見ますと「練歩」という言葉がありまして、かかとをあげず滑べるように歩く、というのです。そして爪先が進む時に少し上がって尺取虫のようだ、とありますから、能舞台の上を歩む能役者の歩みかたに似ているように思います。つまり上体をあまり上下させず、静かにすり足で歩を進め、一歩ずつ爪先がわずか上下する歩き方です。

花魁道中の様子。
現在もイベントの際などに披露されることがある。

茶の湯でも茶室の中の歩きかたは、あまり足袋の裏を見せないように、すり足が基本です。江戸時代の中ごろの官休庵家元の歩きかたを書いたところに、茶室の手前まで水屋から進む時に音がしたとあります。畳の上を歩くのに音がするはずはないのですが、これはおそらくすり足で畳の表面をザーッザーッと足袋でする音ではないかと思います。茶室の中にいる客に茶道口まで亭主が近づいたことを知らせるのです。さもないと、突然茶道口の襖が開いて、中の客がビックリします。

能楽も茶の湯も、最初からすり足だったかわかりません。すり足になった理由は神道の影響ではないかともいいますが、優雅に歩く宮中の練歩を模倣したのかもしれません。

ところがどう間違えたのか、本来静粛な歩きかたであったはずの練る歩きかたが、江戸時代以降、派手なパフォーマンスになってしまったというわけです。

早からず遅からず、無心に歩けるようになりたいものです。

熊倉 功夫（くまくら いさお）
１９４３年東京生まれ。東京教育大学卒業、文学博士。筑波大学教授、国立民族学博物館教授、林原美術館館長、静岡文化芸術大学学長などを歴任し、現在 MIHO MUSEUM（ミホミュージアム）館長、国立民族学博物館名誉教授。２０１３年、中日文化賞受賞。著書に『日本料理の歴史』、『茶の湯といけばなの歴史 日本の生活文化』、『後水尾天皇』、『文化としてのマナー』、『現代語訳 南方録』、『茶の湯日和　うんちくに遊ぶ』、『日本人のこころの言葉　千利休』、熊倉功夫著作集（全7巻）等多数。専門分野は日本文化史、茶道史。

天岸浄圓（あまぎし じょうえん）
1949年（昭和24年）生まれ。本願寺派布教使。
行信教校講師、大阪教区東住吉組西光寺住職。

――昼夜六時に 曼陀羅華を雨ふらす――

いつもながらと言えばそれまでだが、核爆弾、ミサイルなど物騒な話題がつづく年明けであった。

『阿弥陀経』にある「昼夜六時に曼陀羅華を雨ふらす」の経説が心にかかる。「曼陀羅華」の意味の穿鑿は別として、常識では空から花がふるとは考えられない。そこで「そんなバカな」と言われそうな話しである。空から降ってくるものは、雨、雪、霰、雹……で、花など降るはずがないと言うのである。

ところが、空から降ってくるものは決して自然現象だけではない。人類はその出現と共に、自分の命の糧として他の命を取らねばならぬさだめを負った。そのために武器を作るという知恵を獲た。ただ、人類は武器をそのためだけでなく、自分たちの勢力拡大のために用いるようになった。

石を投げたり、落としたり、弓矢を用いることも、槍を投げることも、そのうちに鉄砲を発明し、大砲、爆弾、原子爆弾、ミサイル……持てる頭脳のかぎりを動員して、殺戮の道具を開発しつづけてきた。今や、空からふってくる凶器は、自然現象の恐ろしさよりも、世界中の人間に深刻な恐怖を与え、深い悲しみをもたらしている。それを平和を維持するためとは詭弁に過ぎない。

一九四五（昭和二〇年）年三月十三日から十四日にかけての大阪大空襲では、大阪市内の中心地を焼き尽くし、四千名弱の死亡者、確認された行方不明者は六七八名という被害が出た。そして八月六日の広島、八月九日の長崎での原子爆弾投下。

浄土では空から花がふると説かれる。「散華」である。仏前に花をまき散らす。それは仏を讃える行為である。また、人びとに喜びを与える行いでもある。大慈悲が主となる世界から届いたこの経説は、命の尊厳を示し、人間のおろかさを対照的にあらわし、浄土と穢土の違いを明らかにして、我欲と憎悪と貪りが支配する世界の空虚さを知らせる言葉であったといえる。

編集後記

信長は「人間五十年」という『敦盛』の一節を好んだそうですが、昨今では九十才、百才もまったく珍しくありません。長寿という理想は実現された感があります。しかし一方で、高齢化に伴い、年金、医療負担、介護といった新たな問題が生じています。それにも増して気になるのはわが国における『生』への意欲が希薄な若者たちや、人間性を疑うような現象や事件の発生です。今、改めて『命のあり方』が問われているのではないでしょうか。有史以来、『生と死』という問題の解決は、宗教者がその役割を担ってきました。しかし近年の科学技術や医学のめざましい進歩、社会構造の変化が、長い年月をかけて培われた死生観や命のあり方に影響を与えています。その変化の激しさに我々宗教者のみならず、多くの方が戸惑っているのが現状でしょう。こうした時代に幸せとは？安心とは？そしていのちとは？『道標』が、少しでも皆様の人生の光明となり、何某（なにがし）かのヒントになればと願っております。

合掌

表紙の絵

シュラバスティの春

シュラバスティ（祇園精舎）は舎衛城の近くに、給孤独長者（ぎっこどくちょうじゃ）の寄進によって出来た精舎の趾です。経典には一二五〇人の比丘が住していたと説かれています。今では広大な公園のようになっていますが、釈尊の在世時を観想させる地で、精舎の煉瓦の基壇や丸い奉献塔の基壇が点在しています。遺跡の外は春ともなれば黄色い菜の花そっくりなマスタードの花が咲き誇り、豊かな農地が広がっています。

畠中光享（はたなか こうきょう）
日本画家／インド美術研究家／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい
株式会社 廣瀬佛檀店
0120-81-7065 ☎06-6771-7007
ホームページ http://www.hiro-ban.jp/ [illegible]
〒543-0002 大阪市天王寺区上汐1丁目1-12
（JR天王寺駅下車徒歩2分 阪神へ30m）

仏教を身近にする伝道誌 道標 二〇一八年 春季号 2018年3月1日発行 発行所／浄土真宗を弘める会 萬福寺内 大阪市西区南堀江1-14-23 tel.06-6531-1328 fax.06-6531-1327 e-mail：kuda8.10@gmail.com